

に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にする議論が展開され、各教科等において育成を目指す資質・能力が三つの柱に基づき整理されるとともに、「見方・考え方」も教科等ごとに整理された。「見方・考え方」は、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」とされ、その教科等の本質、その教科等を学ぶ意義とも重なりと言えらる。さらに、「見方・考え方」は「教科等の教育と社会をつなぐ」、言い換えれば、子どもたちが大人になって生活していく際にも重要な働きをするものである。

「見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する授業を実現する上で配慮すべき事項

Ⅱ 「見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する授業を実現する上で配慮すべき事項

(1) 学習指導要領の各教科等の目標と「見方・考え方」

まず、学習指導要領の教科等の目標に「見方・考え方」を働かせることが含まれている(※1)ことを確認する必要があります。

そして、各教科等の学習指導要領の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1 (1)において、「見方・考え方」を働かせる授業を実現するための学習活動の工夫について記載されている(※2)。

「子どもたちが学習や人生において『見方・考え方』を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮される」と求められる」とされ、「深い学び」の視点から授業改善をし、子どもたちの「見方・考え方」を働かせる授業に迫ることが、教師に期待されている。

(2) 授業デザインと「見方・考え方」

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を進める際には、子ども

たちが「見方・考え方」を働かせて学ぶような授業デザインを考えることが重要である。

各教科等の特質に応じて、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、授業改善の在り方を検討することが求められている。

なお、各教科等の解説において示している各教科等の特質に「見方・考え方」は、当該教科等における主要な「見方・考え方」を例示したもの(※3)であり、実際の授業で子どもたちが働かせる「見方・考え方」については、その例示を踏まえながら、学習内容等に応じて柔軟に考えることが重要である。

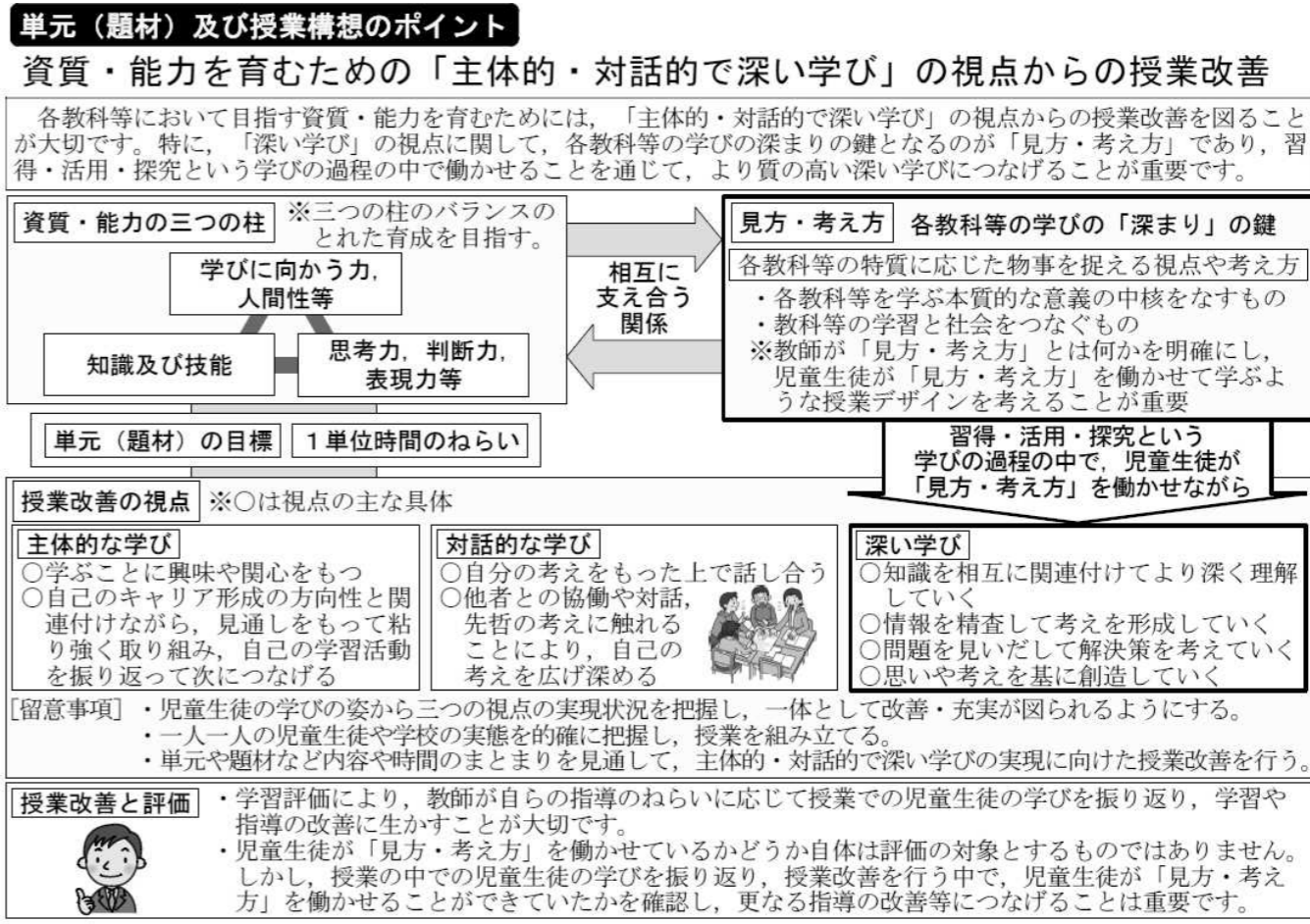
(3) 学習評価と「見方・考え方」

観点別学習状況の評価の対象はあくまでも各教科等で育成を目指す資質・能力をどの程度身に付けているかどうかであり、「見方・考え方」を働かせているかどうか自体を評価の対象とするものではない。

しかし、教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中で子どもの学びを振り返り、授業改善を行う中で、子どもたちが「見方・考え方」を働かせることができているかを確認し、教師の更なる指導の改善等につなげることは重要である。

※1、※2、※3……資料2参照(各教科のみ作成)

【参考】
小学校学習指導要領(平成二十九年告示)解説 総則編
初等教育資料2017年11月号
初等教育資料2019年9月号



社会 社会的な見方・考え方を働かせるための学習課題や発問と資料活用の在り方

資質・能力の育成のために、児童生徒が社会的な見方・考え方を働かせることが大切です。そのために、視点(見方)や方法(考え方)に基づいた学習課題や発問などの構成を、資料を効果的に活用しながら単元のまとまりの中で工夫していく必要があります。

Check 発問について

児童生徒が見方・考え方を働かせるために、視点や方法に基づいた次のような発問を、児童生徒の疑問とともに単元や本時の流れに沿って考えていきます。

I 視点に着目して、社会的事象の様子や仕組みなどを捉える発問

II Iにより捉えた事象を比較・分類・総合して事象の特色を考えたり、地域の人々や国民の生活と関連付けて事象の意味を考えたりする発問

III 社会に見られる課題を把握して、学んだことを生かしながらその解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する発問

Check 資料について

I~IIIの発問に加え、資料を適切に加工したり、提示方法を工夫したりすることが大切です。見方・考え方を働かせるように、何の資料をどのように提示し、どう問うか、併せて考えましょう。

指導事例 自然災害を防ぐ(小学校5年)・発問の例【活用資料】

各時間の学習課題の例

- 日本ではどのような自然災害が起こるのか。
 - I 災害の種類(種類)が起きますか。【写真や年表】
 - 災害の発生回数が多いのに、被害が少ないのはどうしてだろう。
 - I 災害はどんな時(時期)に、どんな所(場所)で起きますか。【年表や災害地図】
 - 水害は夏や秋に多い。
 - I 夏や秋に水害が多くなるのはなぜ(理由)ですか。
 - この時期の雨量に着目すればよいのでは。【雨温図】
 - 地形の影響もあるのでは。【地図】
 - II 日本で自然災害が多いのは何と関連があるといえますか。【年表や雨温図等】
 - II 様々な災害に対する国や県の取組について共通点はありませんか。【写真や対策をまとめた表】
- なぜ、日本は自然災害が多いのか。
 - I・II
- 地震や津波の被害を防ぐために、どのような取組をしているのか。
 - I
- 風水害や火山の噴火、大雪の被害を防ぐために、どのような取組をしているのか。
 - I
- 自然災害を防ぐために、国や県はどのような役割を果たしているのか。
 - II
- 自然災害から身を守るために、これからの生活でどんなことに気を付けていけばよいのか。
 - III

Check 児童生徒の資料活用の技能について

単元ごとに全てを育成しようとするのではなく、資料の特性等に応じて、様々な場面で繰り返し指導することが大切です。※小学校解説 P152~153 の「社会的事象等について調べまとめる技能」を参照(中学校は P186~187)

III 災害から身を守るために、自分にはできることはありますか。【「減災のてびき」(内閣府のHP)等の資料】

資質・能力を育成する「見方・考え方」を働かせることを通して

資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。

「見方・考え方」は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとし、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが求められる。

この「見方・考え方」とは何なのか、「見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する授業の表現に向けてどのようなことに配慮すればよいのだろうか。

I 「見方・考え方」とは何か

(1) 「見方・考え方」の定義

学習指導要領総則において、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」と定義されている。言い換えれば、各教科等にはそれぞれ学習対象があるが、その学習対象にどのようにアプローチしてどのような視点や考え方で捉えるのかという教科等の本質に迫るための視点や考え方が、「見方・考え方」である。

従来から数学や理科などの一部の教科においては類似の概念が用いられてきたが、今回の学習指導要領では、そうした従来の整理とは別に、全ての教科について、再整理している。

(2) 「深い学び」と「見方・考え方」

今回の改訂における審議では、「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で、各教科等の資質・能力の育成の観点から「深い学び」の視点は極めて重要であるとされてきた。「深まり」を欠くと表面的な活動に陥ってしまうという指摘もあったからである。

また、「主体的な学び」や「対話的な学び」はその趣旨が教科共通で理解できる視点であるのに対し、「深い学び」の在り方は各教科等の特質に応じて示される必要があるとされ、各教科等の学びの「深まり」の鍵となるのが「見方・考え方」であるという見解が示された。

(3) 「見方・考え方」と資質・能力の三つの柱の関係

学習指導要領において「見方・考え方」は、育成を目指す資質・能力の三つの柱とは別の概念として整理されている。「見方・考え方」は「深い学び」の鍵になるものとされているが、これは「見方・考え方」を働かせることにより、資質・能力が育まれるという過程で、子どもたちが「働かせる」ものである。

また、「見方・考え方」を働かせることで資質・能力が更にも育まれたり、新たな資質・能力が育まれたりする。またそれによって「見方・考え方」が更に豊かになるというように、「見方・考え方」と資質・能力は相互に支え合う関係にあるとされている。

(4) 「見方・考え方」と当該教科等を学ぶ意義

今回の改訂においては、なぜそれを学ぶのか、それを通じてどのような力が身